

ひょうたん島通信

大槌発! 第44回

岩手県大槌町の大気海洋研究所附属国際沿岸海洋研究センターのすぐ目の前に、蓬萊島ほうらいじまという小さな島があります。井上ひさしの人形劇「ひょっこりひょうたん島」のモデルともされるこの島は、「ひょうたん島」の愛称で大槌町の人々に親しまれてきました。ひょうたん島から大槌町の復興、そして地域とともに復旧に向けて進む沿岸センターの様子をお届けします。



大槌なあなあ日常

野畑重教 大気海洋研究所附属国際沿岸海洋研究センター
沿岸保全分野 特任助教

ここ数年サケの研究のため冬季限定でほぼ常駐に近い滞在をしておりましたが、今年の2月より沿岸センターの常駐の教員として赴任してきました。ただ以前は、早朝（深夜?）に起きて定置網漁船に乗せてもらい水産業に従事する傍ら、空いた時間に余力で研究を進め、ガス欠で放心状態になる16時頃に帰宅するという大槌時間を送っておりました。しかし今は、まあそこそこの時間に起きてそこそこの時間に帰るという普通の人の生活を送ることになり、新緑の美しさやカエルの大合唱といった柏では味わえない自然の営みに新鮮味を感じております。また田舎生活ならではの若干の戸惑いもちらほら。

毎朝、魚の水揚げを見に隣町の船越市場に行っています。今の季節はサクラマス（地方名はママス）やカラフトマス（地方名はサクラマス）などのサケ科魚類が揚がります。「今日はサクラマス（ママス）いっぱい揚がっていますねえ」（私）、「サクラマス（カラフトマス）なんて揚がってねえよお、あれはママス（サクラマス）だあ」（漁師さん）、「はあ……、そ

うですかあ……」（私）、「おめえ、サケの研究してんのにそんなことも知らねえのかよお」（仲買さん）、「……（引きつった笑い）」（私）、なんていうやり取りも最近

は楽しめるようになってきました。クロマグロ、ブリ、カワハギやマダイ、その他雑魚も色々揚がり、四季を通じて魚の変化も眺めていければと思っています。別に物乞いに行っているわけではないのですが時々魚をもらったりもして、通勤電車の朝と違い大槌の朝はなかなかの好スタートを切ることができます。

よく地元のスーパーをウロウロしています。お尻をポンとたたかれて見ると定置網の漁師さんだったり、突然知り合いの方に話しかけられたり、かなりの頻度で顔見知りの方に出くわします。以前番屋でご飯を作ってくれていたお母さんの「がんばってねえ」なんていうやり取りだとテンション上がるのですが、「お

ある日の赤浜地区の風景。左に旧センター（茶の建物）、右に新センター（白の建物）、中央に町のシンボル「蓬萊島」（赤色灯台の島）。



う、何買ってんだ?」（漁師さん）なんてことでかごの中を覗かれたり……。「おちおち気を抜いて買い物もできないなあ」というのがなんとなく本音です。これまた最近はそのなかに気にならなくなりましたが。

以前もそうでしたが、特に最近町の街が目まぐるしく変わっています。新しい家が建ち町づくりの最終形にそって道路が整備されてきています。毎朝、市場見学の帰りに通る高台からセンターのある赤浜地区の写真を撮っています。いずれ旧センターは姿を消し、新たな防潮堤ができ、日々の変化は小さいですが数か月前の写真と見比べた時町の姿は大きく変わっていることでしょう。

調査船「弥生のつばやき」

「ザシキワラシ」大槌へ

「学内広報」読者のごく一部の方々には存在が知られていた、遠野市役所東館庁舎に本年3月まで4年9か月住み着いていた「ザシキワラシ」。どうもこの春から遠野を離れて沿岸センターへやってきたようです。「ザシキワラシ」は住み着いた家に富をもたらすと言われており、実際家財が山のように届きまして、言い伝えは本当なのだと実感した次第です。

再建された沿岸センターの建物のうち、まだ正式運用開始となっていない「共同

利用研究員宿舎」（通称：宿泊棟）がお気に入りらしく頻繁に出入りをしているようですが、なぜかこの建物の中だけは富の気配が感じられません……。彼がこちらへ来てまだ2、3か月ですが、一回につき姿を見せるのはほんの短い時間なもの、それでもはっきり分かるほど目に見えて体形が丸々としてきており、きっと大槌の美味しい海の幸を食べ満足して寝てばかりいるのでしょう。宿泊棟についても一日も早く「力」を発揮して欲

しいものです。



「ザシキワラシ」がもたらした富の一部（車2台）。

制作：大気海洋研究所広報室（内線：66430）